

第二章 神社・寺院

人見神社（妙見社）

人見神社は、地元の人々はもとより、旧一七カ村の氏神として妙見様と呼ばれ、古来より崇敬されている。

社伝によると、大和時代、日本武尊やまとたけるのみことが東征のときに、妃弟橘姫命おみたちほひめのみことが海中に身を投ぜられて海を鎮められ、無事に渡海された話はよく知られ、武尊が妙見山頂にて、なき妃を偲んで悲しまれ、「不斗見そらし給う」により、これが人見になったと伝えられている。その後、妙見大菩薩が祀られたので、本尊の「人の善悪をよく見る妙見」から人見の地名が起きたとも言われている。このように伝承のある山は、獅子の顔に似ているところから獅子頭山ともいい、または妙見山であったが、今は人見山と称している。

この人見山は、東京湾からよく見えて、船の航海をはじめ漁業の盛んなころ（埋立前は、漁場の目標（山をたてると言う）として、また、海の安全と大漁を祈願して、広く信仰されてきた。

現在、人見神社と称しているが、明治七年までの長い歴史のなかでは妙見社と呼んでいた。由来についてはいつごろの創社かわからないが、妙見社も、妙見堂、妙見宮ともいわれていたという。青蓮寺の妙見縁起によると、古くは三七代孝徳天皇の御代、白雉はくぢ元庚戌の年（六五〇、飛鳥時代の後）、日向国より妙見大菩薩を勧請して祀られたと伝え、また治承四年（一一八〇）、源頼朝が源氏再興の旗を上げ石橋山で戦ったが、この

【人見神社神職】



宮崎 正男



宮崎政之助

戦に敗れ、房総の地に逃れようと、土肥、真鶴、六浦の海を渡ろうとしたときに、風波がはげしく難儀の折に、海に秀でた妙見山を見て、妙見大菩薩の加護を祈ったという。無事に房州の竜島に着船し、兵を従えつつ安房・上総と通って人見の妙見社に参詣し、源家再興の祈願をしたと記してある。また伝説によると、年代不詳であるが、昔、大堀の地に僅か二戸しかなかったころ、これを太右衛門・市右衛門といい、ある日、太右衛門が広野に草を刈っていると、草叢くさむらに妙見の尊像が安置されているのを発見し、家に帰って市右衛門と相談し、人見山の山嶺に祀ったといわれている。これを「妙見隠し」といって、今に伝わっている。

妙見社に祀ってあった本尊、妙見大菩薩（今は観音堂に祀る）は北辰尊王とも呼んでいる。北辰とは、北極星を神格化したもので、国土を擁護し、災害を滅除して、人々に福寿を増してくれる菩薩であるといい、また、武の神としても知られ、普通、妙見の形像は、たいてい甲冑かっちゅうを身に付け、剣を帯びて、白蛇を腹にまとって霊亀に乗し、北斗七星を丸い光背に配して作られている。この妙見大菩薩を深く信仰し、一門の守護神、武門の神として祀ったのは、平安時代の武将平良文（千葉氏祖）である。良文は五〇代桓武天皇の皇子、高望王（恒武平氏の祖）の子で、仁和二年（八八六）三月に生まれたといわれ、天性よく器量も抜群であったので、文教をもって民を治めた人であったという。延長元年（九二三）一月、東国へ下って来て後、叔父の平国香が乱を起こし、これを平定すべく良文は戦ったが、非常に苦戦したと伝えられ、そのときに今の群馬県花園村の染谷川で、妙見大菩薩が姿を現わし、化身となって、良文の危難を救ってくれた。このことから良文は妙見大菩薩を花園村より勧請し、秩父郡大宮に妙見の祠堂を建てて



靈 亀

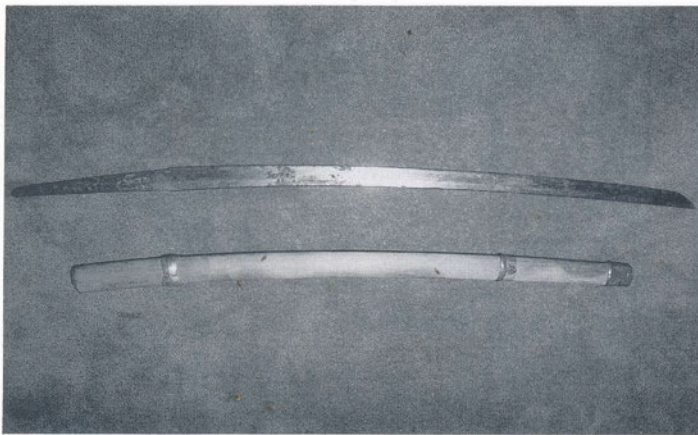
祀った。

やがて良文は、鎌倉郡（藤沢市内）村岡の地を領し、この地にも大宮から妙見を移し祀ったが、その年代は明らかでない。このようにして良文は、天慶二年（九三九）には陸奥守、鎮守府將軍となったが、甥であった平将門が乱を起こした。天慶の乱の後、将門の旧領を賜り、上総・下総・常陸介となつて、この地を復興した。

良文の子である忠頼は、またの名を村岡次郎といい、二二歳のときに父を失った。延長八年（九三〇）千葉郷に生まれたともいわれている。父亡き後は、領の民治によく努めたという。上総介に任ぜられると、父良文の祀った妙見を、村岡の地より人見に移し祀ったのである。また千葉氏は妙見様を崇拜していたので、千葉氏が国司に任ぜられると、その地に妙見を祀っている。千葉大系図によると忠頼の後年とある。天禄元年（九七〇）ごろであったといい、青蓮寺を別当職としたと記されている。

大治元年（一一二六）、千葉常重が猪鼻に城館を築き千葉に入ると、天皇の勅願所として知られていた千葉神社の前身、北斗山金剛授寺ほくとさんに妙見を勧請した。このように千葉一門は先祖代々妙見の加護を誇り、家紋も月星、九曜、八曜など妙見のシンボルマークを用いている。千葉氏の常胤の時代には頼朝の源家再興の挙兵を助け、以来、鎌倉幕府において重く用いられたのを契機に両総（上総・下総）に千葉妙見を勧請し、やがて二総六妙見といわれるようになった。人見神社も、このなかの一つといわれ、この妙見からわかれた妙見社は二〇〇余社もあるといわれている。したがって千葉神社、久留里神社等の祭礼は同じ日に行なわれている。

天正一九年（一五九一）には、徳川家康が青蓮寺に五石の領地を与え、朱印の証を授



小笠原彦太夫長住が人見神社に献納した大刀、長旨の作である

与している。その後、元禄四年（一六九二）、御神刀として、小笠原彦太夫長住が妙見宮に大刀一振を献納しており、爾来、例祭には幣帛へいはくを捧げ、代理を参拝させている。

寛政九年一月二二日、領主小笠原兵庫と氏子の浄財によって、立派な春日造りの社殿が造営された。現在の社殿の前の社殿であって、当時、江戸文化の粋を集めて造った一五〇点余の組物、彫刻は近在の社寺にない、見事なものであった。また、内陣には妙見信仰の対象である使亀の彫刻が置かれている。そのせいもあって神輿の中には亀が祀られていて、祭りの日に神が乗られるという。

明治に入ると、日本も世界の列国におくれまいとして努力し、維新の夜明けとなった。それは王政復古であり、宗教も国家神道（天皇を中心とする）を目途とした。このために神仏混淆はまかりならんと、太政官命令があつて、明治六年に人見妙見も人見神社と名称を変えている。

ながく祀られていた妙見大菩薩も役員協議の上、止むなく観音堂に一時、移しておこうということになり、そのまま現在に至っている。同時に千葉県下の千葉一族が、代々信仰してきた各妙見も、他の仏神と共に同様の運命を辿つたのである。以後、人見神社としては、天御中主神あめのなかつまのかみ、高皇産靈神たかみむすひのかみ、神産靈神かみむすひのかみを祭神としている。

明治・大正・昭和と、日本の宗教は国家神道を中心として歩いたが、太平洋戦争の敗北によって、平和憲法の下に真の民主主義国家となり、宗教も自由となった。

人見山の頂上あたりは、終戦前まで軍の要塞地帯として、区域内は写真の撮影は固く禁止されていた。現在、建てられている埋立記念碑の地（西鼻にしばなという）には、航空標識として高さ三〇メートルぐらいの鉄骨の塔が立てられていたが、老朽化したので、戦後



人見神社

間もなく撤去された。

朝鮮動乱がおこり、日本が金ヘン景気に沸いたころ、人見神社は被害を蒙っている。すなわち社殿の屋根が銅ぶきであったことから、心なき者がこれを剥がしては持去るの
で、この対策に役員は苦勞させられた。

昭和三六年以降、人見・大和田・坂田と近代工業化によって、町も一変していった。昭和四五年四月九日未明に、一人の不浪者の火の不始末によって、社殿・社務所・末社五社等、全焼してしまったのである。誠に悲しむべき災難であり、貴重な文化財であった彫刻の焼失は誠に残念である。翌四六年一月に再建委員会（委員長 守彰三）が組織され、この再建資金として、神社所有山林を町に二、五〇〇万円で売却し、さらに氏子・一般特志寄付金一、五〇〇万円の淨財が寄せられ、工費、その他併せて五、〇〇〇万円で社殿、社務所、鳥居等が再建された。このように再建された人見神社は、氏子を初め近在の人々、企業の守り神として崇敬され、正月の三カ日にはお参りの人たちによって、境内が埋めつくされるほどに賑わっている。

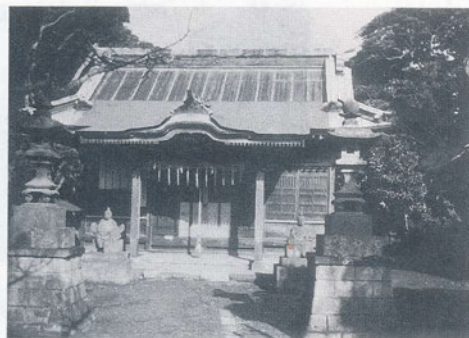
人見神社の手水石

社寺の境内や、門前にはたいいてい手水石（手洗鉢）がある。これはなかの水で、身と心を清めてお参りをするようにと置かれているものである。

人見神社にはいくつかの手水石があるが、観音堂の裏参道の入口にある古い手水石は、延宝三乙卯五月吉日（一六七五）とあるから、今から三一〇年前のものである。寄進者として人見村守八郎右衛門外三名の人名が刻まれている。



寛政 8 年のものと思われる手水石



焼失前の人見神社

神社の大鳥居下の石段の処にも大きな手水石がある。石の表には奉獻御寶前とあり、横に「寛政八丙辰年（一七九六）十一月吉日、願主小川庄助、（欠損） 藁和田□□□□」と刻まれている。人々が神仏を敬信し、広く信仰してきたのが偲ばれる。

大鳥居、狛犬他

人見神社の大鳥居は、昭和四六年に社殿と共に、再建したコンクリート造りのものであるが、この以前の大鳥居は桧材の神明造りの立派なものであった。昭和一六年ごろに、二間塚の古宮恒夫が奉納したものである。今の大鳥居の左側に置かれている二つの大きな石がこの台石で、当時を偲ぶことができる。この石は、古い鳥居にも用いたもので、いつごろの石かわからない。古宮氏の奉納された大鳥居も、三〇年余の年月の間、銅板を巻いたりして延命されていたのである。再建のときにこの大鳥居は製材され、人見神社の内陣にある三宝（供物台）、社務所の机等に再利用されている。また、神社下の石垣も古宮氏の寄進である。

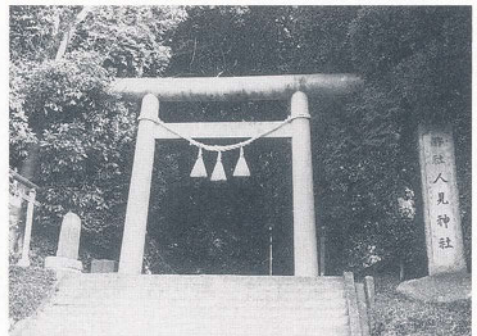
神社の山頂にある鳥居は、昭和五八年に君津製鐵所が、社内安全を祈願して奉納したものである。

この鳥居の両側には狛犬（こまいぬ）が向い合って置かれている。ライオンに似たこの獣像は、昔、高麗（こま）の国から渡来したといい、威厳を添えると共に魔除けとされた像であって、「文化紀元子孟秋之吉、人見村」と刻されている。社殿の横の末社五社の前には、この石像のものより古い狛犬があるが、台の下が欠損していて年代は定かでない。

社殿の前にある一对の大きな灯籠は、大正二年に二間塚の齊藤全衛門によって奉納金



入口の大鳥居＝人見神社



山頂の大鳥居＝人見神社

三〇円とともに寄進されたもので、信仰心の厚かったことがわかる。境内の南端にも大きな灯籠が一本立っているが、これは大正一二年の震災のときに倒壊したので、前の灯籠を模して作られたという。この横に倒れた灯籠の一部が置かれているが、かなりの古い灯籠だと伝えられている。

この灯籠は春日灯籠であり、笠は小さく、丈高く、火袋は六角、二方に雌雄の鹿を刻み、二方に雲形に日月を浮彫りにした特徴のある灯籠である。

社殿の前に石像があり、神を守るように坐した石造りの人物像がある。これは右大臣、左大臣だという。

仁王尊と仁王門

人見神社の大鳥居の参道を登った処に金刀比羅神社があり、同神社の前に大正坂修理記念碑が建立されている。この所に立派な仁王尊(様)と仁王門が建てられていたのがあるが、明治四三年の大暴風雨によるがけ崩れで、惜しくも全壊してしまった。

仁王門は社寺の門であって、左右には形相さまざまの金剛力士が安置されている。

この仁王様は人見山に祀ってある妙見大菩薩の守護神である。

仁王様の御身体は一丈(約三メートル)で、体内に「寛文七年八月(一六六七)武州豊島乃産、江戸中橋桶町の住居助右門、清右門の作」と記されている。世は徳川四代將軍家綱のころである。長らく仁王様の一部が庫裡の中天井にあったが、現在は市の教育委員会で保存している。



狛犬=人見神社

観音堂と十一面観世音菩薩

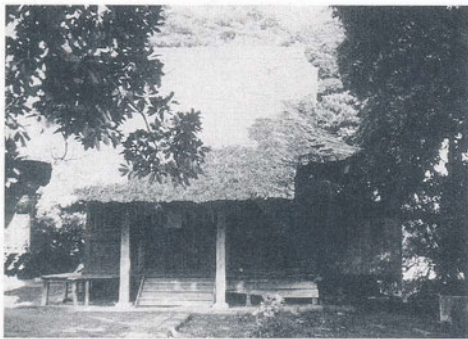
観音様と呼んで、古くから信仰されている観世音菩薩は、大慈大悲（仏の広大な慈悲）で衆生を救うのを本願としている。

また、観世音と称し、六観音、三三観音、千手観音、十一面観音、馬頭観音等があって、そのもとは正（聖）観音であるという。

人見神社の右に建立してある観音堂に、本尊として祀ってある十一面観世音菩薩がある。青蓮寺の『妙見縁起』には、奈良時代の名僧であった行基（六六八―七四九）が諸国を巡遊した折、この地にきて彫造して祀ったものと伝えている。近在の寺院にも行基の作った仏像がいくつああって、寺伝に記されているという。また『君津町誌』によると、平安時代の名門、千葉一族は代々、妙見大菩薩の信仰が厚く、妙見を祀ると、その近くか傍らには観音様を祀ったといわれている。このような事から、人見に妙見を祀った平忠頼は、父、良文の霊を妙見のそばに祀ったといい、これが観音様の由来であると伝えている。

再建された現在の観音堂の前の堂は、茅葺き屋根の古いもので、建立は不詳である。建坪は約一二坪ぐらいであった堂も、老朽して雨洩りもあり、心配されていたが、昭和三八年に檀信徒の寄附金、区有地処分金によって再建された。工費は五〇〇万円で、施工は株式会社斉藤建設が行ない、近代的にコンクリート造りで完工した。この再建には建設委員長長川名邦五郎他役員の努力と苦労があった。

観音様には、寺伝、伝承がある。その一つを紹介すると、青蓮寺の前に草分け七軒の一軒といわれる白井三郎左衛門宅がある。同家の広い屋敷のなかに小さな社が祀ってあ



昔の観音堂



現在の観音堂

り、この社との関係は詳しくは分らないが、白井家代々の伝承によると、その昔、四国から身分のある人がはるばる人見の地に移り住んだという。そのときに四国の地から一緒に持ってきた観音様を、白井家の屋敷内に祀った。その後、ここではもったいないと家人が観音様を背おって人見山頂に移し、祀ったといい、親類を集めてお祭りしていたが、現在は毎年正月、旧暦一八夜の日にもち、赤飯、果物を観音様に供え、青蓮寺が護摩を焚いて、祈願をしている。

人見の長い歴史のなかで、観音様も幾たびかの戦乱、天変地変に遇って、今日まで信仰されてきたのである。今の尊像は、立像で、像高一三三・五センチを測り、様式、構造から見て、藤原時代末期（一一〇〇年ごろ）の作と考えられている。

昭和四五年九月二一日、君津市の彫刻の文化財として指定を受けた、貴重な文化遺産である。

丑（うし）年に当たる観音様の開帳には、本尊を青蓮寺に移して行なわれ、近在からも善男善女のお詣りがあつて盛況である。

近在の観音霊場の札所は、小糸作札と呼び、それぞれに番号がついている。青蓮寺はその一番札所であつて、開帳の時に触元ふれもととなつて、各霊場に伝えている。御詠歌には、「安楽の世界もここに人見山大悲の光り山ぞかがやく」と詠まれている。

末社五社

人見神社の境内西側に、五社が祭祀されているが、五社についてのたしかな記録はない。近郷にあったものを、いつの時代かに人見神社の境内に移し祀つたものと言ひ伝え

られている。

したがって人見神社が古い時代から、近郷近在の信仰の中心であったことがうかがえる。

五社は、八幡神社、八雲神社、浅間神社、春日神社、吾妻神社。

青蓮寺

人見山麓の緑濃き中に、静かなたたずまいを見せている青蓮寺は、幾星霜もの間、村人が心の寄り処とし、また、菩提寺として栄えてきている。山号を人見山と号し、宗派は真言宗豊山派ぶさん（二、六〇〇余ヶ寺）に属している。総本山は十一面観音像でも有名であり、牡丹では日本一を誇る奈良の長谷寺である。青蓮寺の本尊は阿彌陀如来、不動明王を祀り、古くから格式のある寺として、近在に知られている。成願寺（小糸）、真福寺（大貫）、長楽寺（木更津）と共に、真言宗での中本寺ちゅうほんじで、かつて小糸作には寺院の末寺が二五ヶ寺もあった寺である。境内は広く、一、八〇〇坪を有し、正門の前には堀が長く掘ってあり、西側には楠の老木もあって、今も大寺院の形跡を残し、往時の青蓮寺の威容が偲ばれる。かつては、塔中寺院（大寺の中の別坊）として大聖寺が建てられていた。青蓮寺の開祖は宥恵上人ゆうけいであると伝えられているが、その年代は不詳である。

千葉大系図には、平忠頼が上総介に任ぜられるや、千葉一族の守護神として厚く信仰した妙見大菩薩の霊像を、人見の地に祀ったのは天禄元年（九七〇）ごろといい、青蓮寺を別当職としたと伝えているので、奈良朝のころには、既に発祥していたのではないかという。また往時は、山城国（京都）醍醐報恩院の末派に属していたが、明治一〇年

に脱派している。智山派真福寺（小久保）の過去帳に、嘉禄元年（一二二五）乙酉九月二五日慈圓慈鎮和尚、青蓮寺にと記されている。

天文年間に入ると、世は群雄割拠の戦国の様相を呈して、房総の地はもとより、人見の地も、里見・北条氏の戦乱に巻きこまれて、村や家が焼かれ、青蓮寺も全焼。古い記録などごとく焼失してしまった。天文五年（一五三七）と伝えられている。

その後、万治年間（一六五八〜一六六一）に宥永上人によって再建され、中興の祖と過去帳に記してあるが、詳しくは残っていない。それから三〇年後、元禄七年（一六九四）甲戌（こうしゅう）二月二日の絵図面には本堂と山門が画かれており、大きな伽藍であったことがわかる。

境内の東側（今の墓地）にあった大聖寺は、水神山本覚坊と号し、享保八年（一七二三）卯一〇月二八日法印聖運を初祖として、八代続いている。明治一七年までの財産届書が過去帳と共に残されているが、その後に青蓮寺に合併されている。

大聖寺が建立されたとされる約三〇年後の宝暦五年（一七五五）庚子二月二日、火災によってまたも堂宇が焼失してしまった。

このように、幾度かの天災地変によって、本堂・庫裡、鐘楼、そして古文書、過去帳の古いものはほとんど残っていないが、本尊の阿彌陀如来像は、二間塚の與右衛門が江戸中期のころに奉献したものである。

宝暦五年に焼失した青蓮寺は、その後いつのころに再建されたかは定かではないが、明治三年に火災によって類焼し、再建されなのまま、仮本堂を建てて過ごしてきたが、明治四三年八月一日、本堂裏の山崩れによってごとく倒壊してしまった。時の住職



阿彌陀如来=青蓮寺

初祖 聖運
享保八（一七三三）
聖運墓塔
元文二（一七三七）
法印 程運

小柴真海師は再建の意を強くもっていた人で、仮本堂の時から末寺より本堂再建の資金を募っていたこともあって、これらを基金として、苦勞の末、檀家の人々に寄付をお願いし、再建に努めた。大正元年に小糸村の高野又七宅の母屋を、当時の金二四〇円で買取り、本堂を再建した。本堂の格天井に装飾として描かれている龍・草花等の一枚、一枚の天井画（三五枚）の絵は、上野美術学校（現芸大）の学生の作品で現存している。

広い孟宗竹林は、山崩れのとくに危険だと考えた真海師が一株の竹を植え、これが殖え続けられて今のように見事な竹林となったのである。

庫裡も、本堂再建の年に西川の元名主であった小柴家の古い家を買取ってきて再築された。建坪は約三〇坪で台所の広い家であったが、老朽が激しくかなり心配されていた。昭和四六年に総代が中心となり、庫裡建設委員会が設けられ、委員長川名邦五郎他委員の努力によって新築されたのである。資金は区有地の処分金三〇〇万円と、檀家や住職の寄付金四〇〇万円の合計七〇〇万円で完成した。庫裡を壊したときに、台所の階上には古い什物（寺の小道具）や、往時、住職が使ったと思われる駕籠が二丁あった。この駕籠は古いもので、現在は市の教育委員会に保存している。

大正元年に再建された本堂も屋根のいたみがひどくなり、住職五三世光道師も心を痛めた。そこで総代に諮り、関係者と協議を重ねた結果、大改修を図ることになり、近在の寺院を見学、昭和五〇年七月に本堂改修委員会を設置した。委員長に守久治が決まり、委員二〇名が選出され、檀家に浄財をお願いした。浄財の協力要請は、夜、各町内ごとに集まり、住職・委員の幹部から趣旨説明が行なわれた。

施行は大堀の大光建設に発注した。改修工事に入って思ったよりいたみがひどいのが



栗坂光道和尚

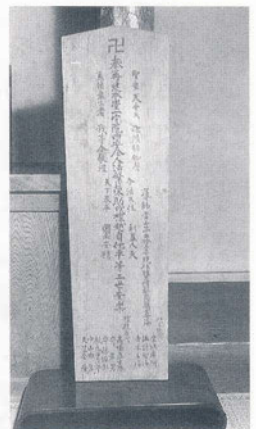


栗坂慶阿和尚



小柴真海和尚

【青蓮寺住職】



本堂再建の棟札＝青蓮寺

わかった。屋根も寺らしく入母屋に改造し、土台等も新しく取り替えた。炎天の下、檀家の惜しみない奉仕協力もあって、大改修が完了した。また、この際に古くなった須弥壇等の内陣整備も併せて行なわれた。この工費は併せて二、一〇〇万円で、この基金として寺有地処分金一、〇〇〇万円、檀家の寄付金一、一〇〇万円が充てられた。昭和五年四月四日、関係者によって盛大に落慶法要式が挙げられた。

妙見尊像の掛軸

青蓮寺に一本の掛軸が残っている。これには妙見大菩薩が画かれ、歌が記されている。歌は「月星を手でとるからに此家農久らし遺たるは恒河砂の数」とある。月星は千葉家の紋所で、恒河は印度のガンジス川のことである。恒河砂は無限の数のたとえであるので、千葉家の隆盛は限りないものであると、詠んだものと考えられる。この掛軸を妙見宮に奉納したのは千葉介定胤といわれ、花押が印してある。定胤は千葉一族の後裔で、祖先の菩提を弔うために、千葉市の登戸にある「登渡神社」の前身であった登戸妙見宮を正保元年（一六四四）九月五日に建立したという。定胤は登戸権之介にもなり、妙見を深く信仰したので、上総の人見妙見宮に参詣した折に、氏族の繁栄を祈って奉納したものである。

社交・スポーツ広場の青蓮寺

青蓮寺は、今まで述べてきたように由緒ある寺院だが、長い年月の中に幾度かの天災地変に耐え、村人の心の寄り処として親しまれてきた。近くは大正一二年の関東大震災



妙見尊像の掛軸

に村も大きな被害が発生し、周西小学校の校舎も倒壊してしまった。村当局は校舎の再建されるまでの三ヵ年の間、青蓮寺を学校として使用したのである。

昭和初期のころ、大衆娯楽のなかに流行してきた浪曲（浪花節）があった。この浪曲界の初代の春日井梅鶯師が、富津市二間塚に住居していた。師が若いころ、まだ浪曲界にデビューしていない時代に本堂に村人を集め、花代（祝儀）を受け、得意の「のど」を聞かせた。演題は十八番の忠臣蔵「大石南部坂の別れ」で、満堂の人々を泣かせ、慰安の一刻を過ごした。師はその後、独特の節廻しで浪曲界を風靡した。

境内の梅の木の下に二つの「力石」がある。この石は、江戸時代から明治中期ごろまで行なわれた力くらべの石である。一つの石には「五拾貫目余（約二百キロ）、源蔵、亀治」と彫ってあるが、石をもち上げた人の名であろう。

昭和五年ごろ、若い人たちのスポーツが盛んになって、特に相撲は近在で力が注がれ、化粧廻し等を新調し、各地で大会が開催された。なかでも青蓮寺境内での大会は盛況であったという。村々の選手が参加し、近在から応援する人々や見物人で、賑やかなものだったと、古老たちは語り種にしている。

人見神社の祭礼も、昭和の戦前までは二二日を中心に、「幟返し」の二五日まで賑やかなものだった。参拝する人たちが遠くからも大勢きて、神社下の道路の両端や境内（資料館の前）に、テント小屋の見せ物が出たり、オモチャ屋、氷屋、綿あめ屋等の店が立ち並び、夜おそくまでカーバイトの明りと匂いで、祭り独特の風景が見られた。

昭和一九年ごろになると戦局は急迫し、本土決戦を唱える軍部は、その備えとして陸軍（暁部隊）を駐屯させた。同部隊は青蓮寺と大堀の静養園を宿舎として使用していた。



力石＝青蓮寺

この部隊は工兵で、人見神社の下の山裾に長いトンネルを掘って物資を入れ、川岸には二トン位の上陸用舟艇を配備し、日夜、訓練をしていた。兵隊は召集兵が多く、境内で竹やりを使って、軍事教練に励んでいた。その召集兵に大声を出して教えていたのは若い兵隊で軍律の厳しさを感じさせたものだ。しかし、年に何回か、夜になると本堂に村の人々を集めて、兵隊たちが慰安会をやってくれた。兵隊たちが自分で作った俄わかか衣裳を着て、即席の劇・踊り・郷土の唄等を演じた。さすがに全国から集まってきたので、芸達者がいて、この夜は笑いと涙の内に、ともに戦時の辛い一刻を慰め合って過ごしたこともあった。村人も楽しみにしていたこの催しも、B29の本土空襲が一段と激しくなり中止されてしまった。今に想うと、つわものどもの夢のあとの句を想いおこさせるものがある。

いまわしい戦争もやっと終わり、村にも平和が帰ってきた。焦土と化したわが国も、平和日本に向かって歩きはじめたころである。

住職の栗坂慶阿僧正（五二世）は、学識のあった僧で、仏教界の役職も務められ、寺院の興隆に貢献した人である。夜になると、若い人たちを集めては、日本の将来を案じ、村の人々の幸せ作りをどうすればよいか、これらについて学問を語り、人の道の道理を夜おそくまで教えてくれた。

日本も、終戦の混乱からようやく落ちつきをとり戻した二四年ごろ、青年団活動がもどってきた。文化面において、自分の考えを主張する町弁論大会にそなえ、本堂を借り練習に励んだ。広い室内には、火鉢しかなく、冬の寒い夜はそれはきびしいものだったが、皆それに耐えてきた。またこのころ、各地に青年たちの素人演芸が生まれた。これ



青蓮寺の歴代住職の墓＝青蓮寺境内

は、戦時・戦後の暗い時代に娯楽らしいものがなく、若者たちの明るさと、エネルギーの発散のものになった。人見でも春の桜の咲くころに、境内に舞台を組んで、本堂を楽屋として用い、村民慰安大会を行なった。演し物は、マドロス、股旅物の衣裳を着て、曲に合わせての踊り、そして、唄・劇があつて、当日は境内が人の波に揺れるほど盛んに行なわれた。この大会に備えての練習は、毎夜、本堂を借用して行なわれたが、あまりにも熱が入って約束の借用時間を過ぎ住職にお叱りを受けるということもあつた。

夏祭りも過ぎ、秋になると、青年団の活動資金を作るため境内で映画会を開いた。当日は天候が心配で、役員は苦勞した。入場券を作って各地の友人・知人に買ってもらい、境内に「むしろ」を敷いて席を作り、秋の夜長の一刻を楽しんだ。このころはテレビもないし、映画が唯一の見る娯楽として人気があつて、境内はいつも満員となつた。当時のフィルムは悪くて、途中で何回も切れ、映画が中断したり、風のある時は映写幕がゆらり、ゆらりと揺れることもあつたが、観客は不平も言わずに協力してくれた。

今のように遊び場、広場がなかつた時代は、どこでも寺や神社の境内が子供や若者たちの広場であつた。先に述べたように相撲大会の会場になつたりしたが、戦後は、陸上競技の練習場としてよく使われた。夏の地区大会に向けて、田の草取りや、浜の仕事を早く切りあげ、暗くなるまで境内狭しと練習に精を出したものである。このころは若者たちの楽しい場であり、語り合う場でもあつた。これらの行事も時の移り変わりや、昭和三六年の青年団の解団とともになくなったが、子供のころから寺や境内で遊び、育つた人々には、忘れられない思い出として胸に残っている。

青蓮寺の鐘楼と梵鐘

昔から梵鐘の話はよくあるが、京都の方廣寺、和歌山の道成寺の物語りは、有名でよく知られているし、誰しも幼いころの唄や、鐘の音に、想いを起こすことであろう。特に大晦日に全国の有名な寺院や、各地の寺で鳴らされる除夜の鐘の音は、心の安らぎを覚えるものである。この鐘は人間がもっている一〇八の煩惱を消滅してくれる伝えが、あることから信仰され、みんなに親しまれてきた。格式のある寺院には鐘楼と梵鐘があった。

梵鐘は「釣り鐘」ともいい、朝鮮鐘と和鐘の二つがあつて、青蓮寺には和鐘のそれは立派な鐘があつた。村人の寄附したものであつた。この鐘楼がいつごろ建立され、鐘が釣るされたかは詳しくは分らないが、明治、大正、昭和と、朝夕に刻を告げて打ち鳴らされ、遠くまで聞こえたと伝えられている。未だ時計が普及していなかった昭和の初期ごろまで、海や、野良仕事の人々に刻を知らせる鐘としても親しまれてきた。

昭和一九年ごろ、第二次大戦の戦局も激しくなつて、政府は物資欠乏のため、総ての金物類を軍部に供出せよとの命令を下し、寺の梵鐘までも強制的に徴用した。時勢とはいえ、文化的遺産の消滅は誠に惜しいできごとであつた。

このようなことがあつて、釣り鐘の無い鐘楼は茅葺きの屋根で長らく建っていたが、屋根の修理もできないままに、時を過ぎた。

昭和五五年に真言宗の宗祖である弘法大師（空海）の一一五〇年の御遠忌があり、全国各地にて記念事業が盛大に催された。青蓮寺としてもこの記念すべき年に、記念事業として鐘楼の再建と梵鐘の購入をしようという意見が檀信徒によって進言され、施工し



青蓮寺の茅葺きの鐘楼、梵鐘は強制的に徴用されて無い

た。鐘楼は人見の木工・守政蔵に、梵鐘は富山県高岡の名工にそれぞれに発注された。工事費は、記念碑の建立も含めて九二〇万円で完工した。このように、檀家の人々の永年の願いが成就して、今や平和を願う鐘として、朝な夕なに打ち鳴らされている。その音は山にひびいて、現代のめまぐるしい世相の中に心の安らぎを覚えさせてくれる。梵鐘も時代と共に生きているのである。

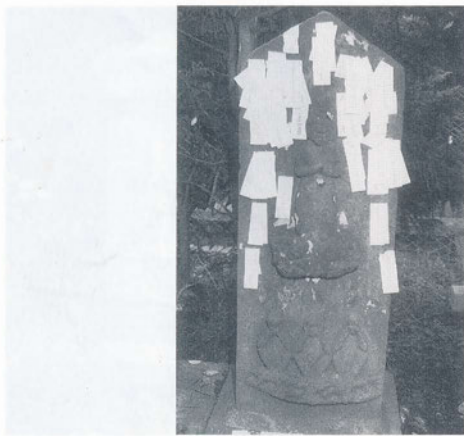
毎年、大晦日には境内にかがり火が焚かれ、熱い甘酒がご馳走されるが、近在からも多くの善男善女が集まって来て、それぞれの願いをこめて鐘を鳴らしている。

庚申塔

石仏のうち、数も多く名前もよく知られているのは地藏様であるが、場所によって多く見られるのが庚申様であろう。庚申様と呼ばれて、昔から信仰されてきた庚申塔・塚は、街の辻や橋の袂にひそやかに佇んでいる。なかでも南総里見八犬伝の物語りに出てくる庚申塚はよく知られている。この庚申とは、仏教で青面金剛しょうめんこんごうと呼んで、もとは平安時代に中国の道教と密教思想が結びついてできた民間信仰である。

青蓮寺境内、大鳥居横の庚申塔

この塔は、以前には人見字堰下の近くにあったものを土地改良のために今の処に移建した。昔から人々は「山王森のさんのさま」と呼んでいた。こんもりした小さな森のなかに祀られていた。塔には正徳二歳（一七一二）二月七日人見講中、講仲間と記してある。



大鳥居横の庚申塔

今は昔の面影は全く無いが、広い田圃の中に建てられていたのは何らかの関係があるのだろうか。

境内の庚申塔より三二年後に建てられたのが、人見神社下に祀ってある庚申塔である。下の部分が欠損しているが、六人の名前が刻んであり、願主としてある。延享元甲子年（一七四四）四月吉祥きつしやうと記してあるのが読みとれる。

金刀比羅神社

「こんびら船々、追手に帆かけて…」と唄にも親しまれている四国の金刀比羅さまは、瀬戸内が内海として航海の要路であった時代に、航海業者および漁民によって、海の守り神様として広く全国的に広められ、明治以降は、浪曲「森の石松こんびら参り」等の演だし物によって、いっそうこれを庶民的なものにしたといわれている。

この神社の祭神は、大物主神おおもものぬしのかみと崇徳天皇すたけといわれ、全国に祀ってあるのは、普通には大物主神を祀ってある方が多い。この神の御神徳は、海上交通の神様として海を照らし、人々に明るい光明の導きを与えてくれる福德の神であるといわれ、この神を信仰して全国に六八三社の分社があるという。

明治の維新までは神仏混合であったので、金刀比羅大権現と称されていたが、今は金刀比羅神社となっているのである。

この神の御神徳を授かって、人見の地に祀られた人見金刀比羅神社の創建は、いつごろか、はっきりとわからないが、現在の社殿前に、長い石段（参道）の右中段に社が建っていた。惜しいかな、明治四三年の山崩れによって倒壊した。



大鳥居横の庚申塔

その後、再建されないままになっていたが、昭和一〇年、浄財によって現在の社殿が立派に再建されている。この再建には世話人の守菊蔵などいろいろと苦心したという。毎年、人見神社の祭礼の日には、金刀比羅神社の前に「ごぎ」を敷いて、参詣される人々におんべ（御幣）を振って、一銭、二銭と再建の浄財を募ったといわれ、これを基金として村人より寄附金を集めて再建されたものである。建築費は当時の金で三八〇円ぐら이었다という。

かつては、地元の人々が海に生き、海の安全と大漁を願って厚く信仰してきた金刀比羅神社であるが、時は変わっても今なお海の守り神様として信仰され、生きているのである。

熊野神社

権右衛門（守正治宅）の「おくまん様」と呼ばれて、古くから村人に親しまれ信仰されている。その「おくまん様」は、守正治の屋敷の内に祀られている。おくまん様は熊野神社のことで、熊野本宮、速玉、那智の熊野三社を総称したものである。

祭神は素戔嗚尊、家御子神、熊野速玉神、熊野夫須美神、他の神々が三社に祀ってあり、神代の昔に鎮座したと伝えられている。

この神は、古代から信仰されていたといわれ、平安中期以降、浄土信仰が起ったとき、この熊野の地に西方浄土の信仰が生まれ、古い民俗信仰が再び燃え上がったものといえる。すなわち、生きているうちにこの常世の国の地を踏んで信を重ね、結縁しておきたいという念願で、盛んに熊野詣が行なわれ、延喜七年（九〇七）に宇多法皇がこ



金刀比羅神社の竣工 昭和一〇年

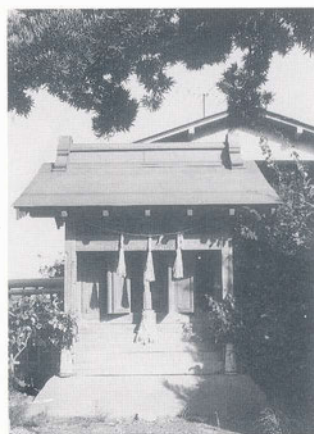
ここに足を運ばれたのを初めとして、上皇、女院にょいんの貴族の方々もお詣りしたという。それが庶民の間にも広まって、「蟻の熊野詣」という言葉さえ生まれて盛んに信仰された。

しかし、今のような交通の便が無かった時代、熊野の地は遠く、容易に足を運ぶことができなかったので、熊野先達せんだつといわれる修験者が熊野の地で修業し、この先達の人々によって各地に広められた。そして、熊野三社の分霊を勧請して、全国各地に三、〇七八社の分社を祀ったといわれる。

守正治によれば、いつのころにお宮を祀ったかは分らないが、元は別の処にあった社を現在の地に移し、祀ったという。

お宮の土台石、土台は古くなっており、何回もとり変えて再建されたとみられる。中にある棟札むなだには「慶応四〇〇〇〇施主権右衛門、棟梁藤原面通久右衛門作、八郎左エ門同定五郎寄進」と記されている。また、社前には手水石と狛犬が二像奉納されていて、願主は石井庄次良とあり、金耆両を吉濱六右衛門、金一朱を石井金左衛門と白井太左衛門が、それぞれ奉納と刻んである。

家人によれば、明治三年の人見の大火のときには焼失を免れたそうで、いわば靈驗あらか灼あな神として代々に崇敬されてきており、祭日（旧暦九月九日）には赤飯を献じてその日を祝っているという。今は余り見られないが、花嫁さんが結婚式に出る前に、このおくまん様にお参りして幸せを祈ったほか、七五三のお祝いにも親子でお参りしたものである。



おくまん様の別称がある熊野神社

八雲神社（天王様）

天王様と称して昔から親しまれ、村人から厚く信仰されてきた。人見には二カ所に祀られているが、いずれも屋敷の内に社がある。近在の君津市三直の天王様、富津市大堀の大六天王様がよく知られている。

明治の維新までは天王様と呼んでいたが、政府の国家神道を目途とした政策によって、神仏に分けられて、名称も八雲神社とかわって今日に及んでいる。祭神は素戔鳴尊であるという。

重郎右衛門（秋元安治宅）にある天王様は、いつの時代に祀られたかわからないが、秋元家は人見でも古いとされる家柄であるので、昔から祀ってあったという。神棚には牛頭を頭上にいただいた牛頭天王が祀られ、朝夕に灯明がつけられ、拝まれている。この牛頭天王とは、もとはインドの国の祇園精舎の守護神であり、また、除災の神として信仰された。

秋元家では、毎年旧暦六月七日の祭日に町内の人たちを招いて祭礼を行なっている。この習しは代々続けられている。今の社は古くなり、いたみも激しくなったので、町内の寄進等によって昭和三六年に再建された。

善次郎（守忠雄宅）の天王様も、いつのころからの創祀かは詳しくはわからない。この天王様は石造のお宮で稲荷様と併せて祀ってある。

家人の話によると、前に漁業をしていたころは海の安全と大漁を祈って守家代々崇敬してきたと語り、家で作ったナスや、きゅうりの初ものは、社に上げてからいただくという。このようにして天王様信仰は広まり、毎年六月ごろ田植の終わったときに、町

内の人々が一緒になって「七天王詣り」といって、朝から近在の天王様を歩いてお詣りする。家内安全、無病息災を祈って一日を楽しく過ごし、一時は盛況の時代もあった。この天王様詣りは敬神はもとより、村の人々の和とレクリエーションを兼ねた行事でもあった。

弁財天（弁天様）

祭神は、七福神のなかの神で琵琶を持っている弁天様で、弁財、福德、知恵を授けてくれる神として知られている。もとは水の神として神格化された神様で、全国に有名な安芸の宮島の厳島神社にも水の神として祀ってある。

古来、農耕には灌漑用水として池や堰が作られ、海上交通には水路守護の神として、それぞれ神徳がたたえられ、信仰されてきた。

人見字堰下の池には、一〇坪余の処に弁天様が祀られていた。この上の処に古くから堰があったと伝えられ、小字の地名から当時の事が偲ばれる。この堰を守り、水の守護神として、村人が五穀豊穰を祈念して弁天様を祀って信仰していた事が思いおこされる。この石造には弁財天とあって、明治二四年三月一五日再建と刻まれているので、古くから祀られていたと考えられる。

昭和四五年に土地改良が施行されたので、青蓮寺の境内に移建された。祀ってあった土地は人見の区有地として永らく管理されていたが、昭和四四年に処分され、人見青年館の建設資金の一部として使用された。



善次郎の天王様



牛頭天王

地藏菩薩（地藏様）

「お地藏さん」と呼んで唄や劇に出てくる話しは古くからあり、広く信仰されている。この地藏は地藏菩薩といい、寺院の境内、道端に、時の流れを見守るかのように建立されている。この信仰は平安時代におこり、江戸時代に盛んになり、今日に及んでいるのである。地藏様は、お釈迦様が入滅の後、弥勒菩薩の出生するまでの間、無仏の世界に住して、六道の衆生を仏道に向わせてくれる仏であるといわれ、俗に死後の児童を賽の河原でお救いしてくれる菩薩ともいう。

人見にも、何か所かに地藏様が祀つてあるが、土地区画整理事業の施行によって、青蓮寺境内地に移し祀つたものもある。このなかに、前畑には幾体かの地藏様があり、古いのは元禄時代のものもあって、境内の万霊塔に祀つてある。また、正門の処には大きな石造地藏があるが、これには寛政九丁巳歳（一七九七）願主村行人講中、村役人中、八郎右衛門と記され、さらに故人の名前と何人かの願主が刻まれている。村人が祖先を敬い、故人の供養をし村の平和を祈つたのが伺われる。このように地藏様は、人々の病気を治し、あらゆる願いごとを叶えてくれるというありがたい仏さまとして、今日までも厚く信仰されているのである。

毎年、春秋の彼岸には、その年に亡くなった人の供養に、身内の人が「符打」と呼んで、寺院より「護符」を受け、近くの地藏様にお参りし、護符を貼って故人の冥福を祈っている。



青蓮寺の地藏様



弁財天

六地藏

青蓮寺境内にある六地藏も、昭和四七年の小糸川災害復旧助成改修工事によって移建されたもので、前は現在の中橋の川岸に祀られていた。明治四三年二月一日に守勇吉建立とある。

六地藏は仏教のなかで、六道のそれぞれに現われて、衆生を救う地藏菩薩であって、普通は六体を並べて安置されているが多い。この地藏は、六体を一緒に彫って祀った石造りである。

毎年、八月二四日の「うらぼん」になると、念仏講の人たちが集まって、海・川で亡くなった人と、身寄りのない「無縁仏」の霊を慰め、供養を施している。以前には、海・川岸に地藏様を祀ってあった所で行っていたが、現在は境内に祀っているので、本堂で地藏様のある方角に向かって坐り、供養をしている。

薬師堂と薬師如来

薬師如来は、薬師さまと呼ばれ各地に祀られ、昔から深く信仰されている。本尊は多くは薬壺やつかをもって衆生しゅじょう（総ての生き物）の病苦を救ってくれる仏で、奈良にある薬師寺は、飛鳥時代の天武天皇のころに建てられ、全国にその名が知られ広く信仰されている。青蓮寺にも古い薬師如来像が安置されている。この如来像は、前には人見字前畑の地に薬師堂と共有墓地があり、その堂内に祀ってあったものを土地区画整理事業によって青蓮寺に移した。堂は古くて解体され、墓地は組合の計により境内の霊園に改葬された。



六 地 蔵



亡くなった人の供養に身内の人が行なう「符打」

本尊は江戸の中期ごろの作といえる。

薬師堂はいっ建てられたか詳しくはわからないが、人見に残っている絵図面（寛文年間、一六六五ごろ）に薬師堂が画かれているし、天保六年二月には堂守の法師がいたことが青蓮寺過去帳に記されている。また、堂の前にあった共有墓地に地藏様が数多くあり、元禄時代ごろの石仏があつて、萬霊塔ばんれいとうとして納められている。

明治七年一月には、人見校が開設されているので、大きな堂であつたと考えられる。

この後に再建された堂は昭和一年に念仏講の人たちによつて建てられたもので、建て坪が一二坪ぐらいのトタン葺き平屋であり、薬師様を祀つてあつた。戦前にはこの堂と広場が子供や若人たちの会合の場所としてよく使われたものである。戦後、間もなく住宅として何組かの人々が住んだり、小糸川の改修工事や、昭和四三年ごろ行なわれた人見土地改良の施工業者の作業員宿舎として使われた。

不動明王（不動尊）

一般には不動さまと呼ばれ、成田山の不動明王は全国に知られ、古くから広く信仰を集めており、各地に祀られている。

不動明王とは、十三仏のうち唯一人の明王であり、明王は大日様の化身で、なかなか仏を信じない衆生（人々）も含めて救うため、仮りに忿怒こんぬの姿を現わしている。しかし、内心は慈悲に満ちており、精霊はもちろん、人々に商売繁昌等、この世のご利益を授けてくれるという本尊である。明王は右手に降魔の剣を持ち、背に大火焰を背負い、岩座いわくらといつて岩の上に坐し、おつきの使者として八大童子がいるが、普通は「こんがら」「せ

いたか」二童子が前立ちになっている。

不動信仰は、庶民の日常生活に密着した現世利益の上になりたっている。それは不動明王に祈禱を捧げることで、多くは護摩供養による功德の積み重ねを意味しているという。

山下の波切不動様

人見神社の山の下の今のポンプ場の処に永らく祀られ、人々の信仰を集めていた。昭和四七年、新日鐵の送水管工事により、青蓮寺の境内に移し祀られた。石塔の表には不動明王が刻まれ、明治三三年旧八月とある。

波切不動様は、弘法大師が唐（中国）に渡った時に台風に遇って船が沈みそうになったので、自らお彫りになって御祈禱して難を免かれたということで有名である。

古老の云うには、海、川の安全を祈って漁師たちが不動様を祀ったといい、漁舟の舟着場として使われた処でもある。明治四三年の人見山のがけ崩れの際には、不動様だけは埋まらずにすんだと語られている。

御嶽神社

木曾の御嶽神社の分社が、人見の馬込九一二番地に建立されたのは、昭和二年三月二十四日である。

神社の敷地は、貞元村中富の斉藤吉郎兵衛が寄贈したものである。同氏は米穀肥料商を営み、苦勞して財をなした人だったが、人望もあり、御嶽神社の熱心な信者であった。



波切不動様

その吉郎兵衛が商売のかたわら人見にも御嶽講をつくり、講社を拡張して、神のご加護、ご利益にあやからせたいと、日夜、東奔西走したのである。

こうした吉郎兵衛の努力と指導によって、数年もたたぬうち人見区内の大半が講中となり、御嶽神社を崇拝するようになった。そして、大和田、中野、大堀、飯野、吉野方面からも多くの信者が参集するようになった。そこで吉郎兵衛は、人見に御嶽神社の建立を志し、講中のなかから一〇数名の世話人を選んで昼夜を問わぬ会合を重ねた。

その結果、建立の計画がまとまり、具体化することになった。神社建設の敷地は吉郎兵衛が自分の所有地の一部を提供し、資金は吉郎兵衛を初め、世話人、関係講者の寄附金で賄うこととなり、大正一五年の春、着工に踏みきった。そして、さまざまな苦勞を伴いながらも昭和二年三月、みごとに完成したのである。

開山式の当日には、吉郎兵衛による「湯立て」の儀式が行なわれることになった。この珍しい儀式が評判になり、これを見物しようと近郷近在より多くの善男善女が参詣につめかけた。神社の境内は満員の盛況であったという。

「湯立て」の儀式というのは、社前の周囲に紅白の幕を張りめぐらし、四方に青笹を立てて、縄を張り、その中央に大釜いっぱい湯を沸騰させる。湯が沸くとその前でしばらく祈禱し、熊笹で沸騰した湯を頭上から浴びるといふ荒行である。この荒行に講者をはじめ参詣者はただ驚嘆するばかりであったが、吉郎兵衛は火傷ひとつしなかった。また、この湯立ての儀式に使った薪の残り炭を、参詣に来た人々は皆、一片ずつ持ち帰り、門の柱や玄関などに吊るして、火難の防除と家内安全、五穀豊穡を祈った。これは現在もお引き継がれている。



御嶽神社

この「湯立て」の儀式は、開山以来、絶えることなく先達に引き継がれ、現在も毎年三月一四日の祭礼に、社前において執り行なわれている。

なお、齊藤吉郎兵衛が神社の敷地として提供した土地は六七・五坪。昭和八年九月三〇日、長男の齊藤栄作から御嶽神社に寄贈、登記されている。

御嶽神社の祭神は、くにとこたちのみこと 国常立尊、くにさつちのみこと 国扶槌尊、とよくんむのみこと 豊斟淳尊で、昭和二年三月一八日に奉遷している。歴代先達は次のとおり。

《御嶽神社歴代先達》

- 初代 神明大神 齊藤吉郎兵衛師
- 二代 清心霊神 磯貝仙次郎師
- 三代 寶清霊神 石井長吉師
- 四代 寶覚霊神 守 平蔵師
- 脇座 真清霊神 吉浜善蔵師
- 五代 神徳霊神 沼田清次師
- 脇座 徳明霊神 守 文七師
- 六代 照山霊神 石川真一郎師
- 七代 照覚行者 齊藤 實師

浜川神社（厄神様）

文久・慶応のころ、このあたりの村一帯に悪疫が流行し、老若男女を問わず多くの人が

たちが次々と死亡した。現在のように医療が発達していない時代であり、なすすべも無く、ただただ神仏にすがるより外に手段はなかった。そのころ江戸大森海岸に浜川神社といって、厄払い、悪魔払いのご利益で評判の高い神社があることがわかり、海岸地帯唯一の交通機関である漁船で東京湾を渡って詣で、ひたすら疫病払いと家内の安全を願った。そんな状態が何年か続いているうち、悪疫はしだいに下火になっていった。

こうしたことから、後年、有志の人たちが図り、人見に浜川神社の分社を建立することとなり、後記の人たちの努力によって、人見一二九番地に現在の厄神社が建立された。その後、地元の人見の信者によって厄神講がつくられ、毎年、町内ごとに回り番で宿となり、講者が集って祈祷をし、厄払いと家内の安全を祈った。その宿に当たった家では、御馳走を振舞う風習となり、現在まで伝え続けられている。

また、毎年一〇月二四日に祭礼が行なわれており、前夜祭である二三日の晩には、近郷近在より善男善女が参詣に集まり、社前の広場や道路の両側に、その時代をとらえた川柳入りのイラストを描いた地口行灯ちぐちあんどんが数多く立ち、屋台店がならび、夜を徹して盛況を呈したものである。

大正一四年、行政上その他の事情から、人見と神門に分離した。そのころに前後して、厄神社も人見の青蓮寺境内にあった公会堂内に分社された。

こうした経緯から、人見の講者は、祭事の一切を分社した公会堂内の厄神社で行なうようになった。しかし、青蓮寺の整備に当たって、同寺境内にあった公会堂が道路をはさんだ反対側の山下八五三一五へ移転した。

その後、昭和四五年に青蓮寺境内に青年館が新しく建設されたことにより、老朽化し



浜川神社

た公会堂は解体撤去することとなった。これに伴って、厄神社も移され、現在にいたっている。

なお、本社の浜川神社へは、いまだに毎年二月二三日、人見と神門の両者が一緒になって、大型バスを借り切って参拝を続けている。

神社には次のような記録が残されている。

祭神 素戔鳴尊すさのねみこと

奉遷 明治二四年七月二四日、武蔵国荏原郡字浜川鎮座浜川神社厄神大神の分魂を人見に奉遷す。

浜川神社々掌 大野兼太郎

発起人 佐野庄太郎（所左衛門）

守 八郎（八郎）

石井源次郎（源吾）

世話人

人見 神門

秋元久三郎 白井角次郎

白井 和吉 斉藤 周蔵

白井辰五郎 天笠 栞松しらまつ

白井 源蔵 白井初五郎

石井源三郎 白井 清吉

守 市五郎 白井 和吉

◆地口

ことわざや成語などによく似た発音の文句を作っている。

「一富士、二鷹、三茄子」をもじって

「雪見に来たか三合舟」というなど。

上方では口合くちあひといった。地口行燈は「地口」を

書いた行燈。多くは神社の祭礼などのときに戯

画といっしょに書いて路傍に立てる。

平野藤次郎 平野小三郎

大宮神社

「大宮さま」と呼んでいるこの神社は、おおみやひめのみこと大宮姫命、うけもちのかみ保食神、うがのみたまのみこと倉稻魂命の三神が祀つてある。

いつごろに創建されたかわからないが、久保にある大宮神社は元祿のころの創建といわれている。

人見に「大宮台」という名が残っている。文字どおりここに祀つてあつた社を、昭和一〇年八月、近くの高徳宅の屋敷の一角に移建した。この社は、約五坪余のもので、町内の集会所を兼ねていた。祭礼は、毎年、一〇月一七日に行なっていたが、その後、五年四月に現在の地に、再度、移建し、今は町内の人々によって管理されている。

淡島神社（あわしま様）

周西幼稚園北側の山の下に、江戸時代にこの地を治めた小笠原兵庫の陣屋があつた。この陣屋との関係は定かでないが、山裾に小さなお宮がある。守治郎右衛門（守喜一）によって守られている。この宮を淡島神社という。祭神は、すくなひこなのみかみ少彦名神であり、婦人病に靈験があるとされている。和歌山市にある加太神社かたの俗称であり、この神社は全国によく知られている。

また、冬になると、その年に使つた針を納めて供養することでも知られている神社である。



淡島神社



大宮神社

守氏の話によると、いつごろの創建かわからないけれど、かなり古いものらしい。山崩れによって倒壊したこともあり、何回も再建されたという。今は、稲荷様を併祀している。

太右衛門の不動様

周西幼稚園の前に新日鐵社宅に通ずる昔からの山道がある。この道の中腹に、古くから不動明王が祀られている。地元の人々は、「太右衛門（たえむ）の不動様」と呼んで信仰してきた。今の本尊は石造で、高さ五〇センチ余の像一体と、おつきの使者である「せいたか、こんがら童子」が祀ってある。文政一二年（一八二九）巳六月六日に信者によって寄進され、明治一六年八月一五日には、お堂の脇に立派な「お瀧」が造られ、奉納された。このお堂も明治四三年の山崩れによって、総てが押し流されてしまった。しかしその後、信者によって再建され、五坪余の堂を建て、お瀧も修復された。

今、管理している佐野宅の話によれば、明治、大正のころまで毎年旧曆二月二十八日の命日には近在の人々が参詣して、一晚中賑かに過ごしたという。この夜は不動明王の赤い幟を立て、多くの行灯に火が灯されて、その風景は見たえのあるものだった、と語っている。また、このお堂に「お籠り」して祈願する人々もあったそうだが、この不動明王堂も古くなって、昭和三六年前ごろとりこわされて今にいたっている。そのころに山頂がけずられて君津製鐵所の社宅ができたので、お瀧の水も出なくなってしまった。

お瀧の水は、山肌から出る湧き水で、水道ができるまでの永い間、佐野家ではパイプを配し飲料水として使用していた。このお瀧の水は冷たく、夏の暑いときはよく子供た



太右衛門の不動様

ちが飲みに行ったものである。

このように不動様は、代々、佐野家によって管理されているが、同家には、お堂に祀ってあった鏡が保管されている。これは昔からあったものらしく、「藤原光長」の銘が記されている。

西向きの地蔵様

大宮神社の脇に、等身大の古い石造の地蔵さまが祀ってある。

この地蔵は、「貞享元年（一六八四）甲子九月、人見村、念仏講仲間、表右衛門」他一四人によって作られたと刻んである。普通、地蔵は北向きが多いが、西向きの地蔵は少ない。当時の人々が悪病とたたかい、亡くなった子供たちの供養と、村の無病息災を祈って、西向きに建立したものと考えられるのである。

また「いぼ」のなせる地蔵ともいわれた。これはまじないからきたもので、地蔵様にあげた線香の灰を「いぼ」につけてお詣りすると効果できめん、いぼがとれるということとで参詣する人も多かった。

なお古老の話によると、大正初期ごろまで右記の地蔵さまの近くに約五坪ぐらいの地藏堂が建っていて、子供の遊び場であったという。この地藏堂のなかには木像の地藏様があり、現在は青蓮寺に移して祀ってある。

川向の地藏様と馬頭尊

人見の川向こうに、地藏さまと馬頭尊が祀ってある。この両尊は、土地区画整理事業



川向の地藏様(左)と馬頭尊



西向きの地藏様

の施行に伴い、川向こうの町内の人たちによって、今の地に移し祀られたものである。前に祀ってあったところは、川向こうの東の地に堰止めがあり、揚水場があつて、この川岸に古くから祀られていた。昔、川で遊んでいて、溺れて亡くなった子供の供養に建立されたといひ、いつごろに建立されたのか年月は刻んでない。また、この地藏さまは齒痛止めや頭を良くする仏様として地元の人々から敬われている。

一緒に祀つてある馬頭尊は、馬頭観世音菩薩（馬頭観音）で、馬の保護神として江戸時代に広く信仰された。

古来から馬は農耕に使用してきたので、供養のために建立したといわれている。この石碑に、「馬頭尊、安政七年（一八六〇）丁卯三月、高橋清右衛門」と記してある。現在、町内の人たちによって管理され、花や線香が供えられている。最近、馬はほとんど姿を消したが、昔も今もその信仰に変わりはない。

